

茨城県教育財団文化財調査報告第181集

12県単急傾斜地崩壊対策 第451-052号

災害関連緊急急傾斜地崩壊対策工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

滝坂横穴墓群

平成 13 年 3 月

茨城県高萩土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第181集

12県単急傾斜地崩壊対策 第451-052号

災害関連緊急急傾斜地崩壊対策工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

たき さか おう けつ ほ ぐん
滝坂横穴墓群

平成13年3月

茨城県高萩土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県北部は東に太平洋を望み、そのほとんどを阿武隈山地系の丘陵が占めている風光明媚な土地柄を示しています。このたび、茨城県高萩土木事務所が災害対策措置として緊急に急傾斜地崩壊対策工事を実施することとなり、工事地内に古墳時代終末期と考えられる滝坂横穴墓群の存在が確認されました。

茨城県教育委員会では高萩土木事務所と埋蔵文化財の取扱いについて協議した結果、記録保存措置を講じることとなり、財団法人茨城県教育財団が委託を受けて記録保存のため平成12年9月に発掘調査を実施いたしました。

本書はその発掘調査の成果を収録したものであり、本書が学術的な研究資料としてはもとより、教育・文化の向上の一助として活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県高萩土木事務所には多大なご協力をいただきましたことに対し厚くお礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、高萩市教育委員会をはじめ関係各機関及び関係各位から御指導・御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成13年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤佳郎

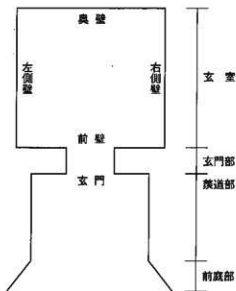
例 言

- 1 本書は、茨城県高萩土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成12年度に発掘調査を実施した、茨城県高萩市大字高萩1523-1に所在する滝坂横穴墓群の発掘調査報告書である。
- 2 当横穴墓群の発掘調査期間及び整理期間は、平成12年9月1日～平成12年9月30日までである。
- 3 当横穴墓群の調査は、調査第一課長阿久津久の指揮のもと、調査第2課班長瓦吹堅が担当した。
- 4 当横穴墓群の整理及び本書の執筆・編集は調査第2課班長瓦吹堅が担当した。
- 5 発掘調査及び整理に関し、下記の機関や各位にさまざまな御指導と御協力を賜った。深く感謝の意を表すものである。

関係機関 茨城県教育庁文化課 茨城県高萩土木事務所 高萩市教育委員会 十王町教育委員会
協力者 征矢真一 鈴木裕芳 片平雅俊 西野 保 (敬称略)

凡 例

- 1 当横穴墓群の調査は、公共測量点NO39 ($X=79523.693m$ $Y=78685.024m$ $Z=8.016m$) を基準とした。
- 2 横穴墓群の形状や各部位の名称は、下記のとおりである。
- 3 土層観察における色調の判定には、「新版標準土色帖」を使用した。
- 4 遺構実測図については、その縮尺を図版中に明示した。
- 5 横穴墓などの主軸方向は、奥壁と玄門の中心部を結んだ軸線とした。
- 6 横穴墓各部名称については下記の通りとした。



抄 録

ふりがな	さいがゆんれんさんきゆうきゆうけいしやちほうかいさいくこうじにともなうまいぼうふんかさいちようさほうこくしよ							
書名	災害関連緊急急傾斜地崩壊対策工事に伴う埋蔵文化財調査報告書							
副書名	滝坂横穴墓群							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第181集							
著者名	瓦吹 堅							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL. 029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL. 029-225-6587							
発行日	2001年(平成13年)3月21日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
滝坂横穴墓群	茨城県高萩市大字高萩 1523-1	08214 29	36度 42分 50秒	140度 42分 48秒	18~ 23m	20000901 ~ 20000930	900㎡	急傾斜地崩壊対 策工事に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
滝坂横穴墓群	墓跡	古墳時代	横穴墓 3基	なし		すでに開口していた横穴墓3基と時期不明の小横穴2基、さらに崖面に残る加工跡を調査。横穴墓群はこの地区に分布する横穴墓群の一支群と考えられる。		
	その他	時期不明	小横穴 2基	なし				
			加工跡 18か所	なし				

目 次

序

例言・凡例

抄録

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	6
第1節 遺跡の概要	6
第2節 遺構	6
(1) 横穴墓	6
(2) 小横穴	12
(3) 加工跡	14
第3節 まとめ	22
付篇 茨城県内横穴墓関係文献一覧	24
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 滝板横穴墓群位置図	3
第2図 滝板横穴墓群全体図	7
第3図 1号横穴墓実測図	9
第4図 2号横穴墓実測図	10
第5図 3号横穴墓実測図	12
第6図 1・2号小横穴実測図	13
第7図 1～4号加工跡実測図	15
第8図 5～11号加工跡実測図	17
第9図 12～16号加工跡実測図	20
第10図 17・18号加工跡実測図	21

写真図版目次

PL 1 滝板横穴墓群遠景 (南方向から)	PL 4 3号横穴墓奥壁
滝板横穴墓群近景	1号小横穴
滝板横穴墓群近景	2号小横穴
PL 2 1号横穴墓	PL 5 横穴墓群調査作業風景 (西方向から)
1号横穴墓階段施設	横穴墓群近景 (東方向から)
1号横穴墓奥壁	1・2号加工跡
PL 3 2号横穴墓・2号小横穴・1号加工跡	
2号横穴墓奥壁	
3号横穴墓	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成12年7月24日、茨城県高萩土木事務所が災害関連緊急急傾斜対策工事予定地の高萩市大字高萩1523-1の立木等の伐採工事を実施したところ、崖面から横穴墓が発見され、高萩市教育委員会に連絡が入った。高萩市教育委員会ではその旨茨城県教育委員会文化課へ問い合わせ、翌25日に文化課によって現地踏査が行われた。その結果、その横穴墓は周知されている滝坂横穴墓群であることが確認され、高萩土木事務所へその旨が伝えられた。

7月27日には高萩土木事務所長から茨城県教育委員会教育長宛に、災害関連緊急急傾斜対策工事事業地内の埋蔵文化財（滝坂横穴墓群）の取扱いについて協議書が提出された。文化課では取扱いについて協議し、7月28日、滝坂横穴墓群について記録保存のための発掘調査を実施すること、併せて調査機関は財団法人茨城県教育財団となることを回答した。

文化課と財団法人茨城県教育財団は発掘調査期間等について協議の結果、平成12年9月に調査を実施することで合意し、財団法人茨城県教育財団では調査に関わる諸準備を進めた。

第2節 調査経過

滝坂横穴墓群の発掘調査は、平成12年度県単急傾斜地崩壊対策第451-052号災害関連緊急急傾斜地崩壊対策工事に伴って、平成12年9月1日から9月28日の間実施した。

調査開始前は、その対象が開口した横穴墓3基とされていたが、調査の結果、横穴墓3基・小横穴2基、そして崖面に残された加工跡18か所が確認された。

ここで調査の経過についてその概略を記述する。

9月1日～5日は、発掘調査のための器材の搬入や調査事務所の建設、さらに足場の組み立て作業を委託して実施した。

横穴墓群の現況の写真撮影や横穴墓群前のテラスに堆積した土砂の排土作業は6日から開始した。テラスにみられる凝灰岩の削滓状の堆積土は意外に多く、また木の根が複雑に入り込んでいるため排土作業には手間取ったが、調査補助員以外に当財団調査員の研修を兼ねた応援を得て実施した。

排土作業終了後、遺構数は横穴墓3基・小横穴2基のほか、崖面に18か所の加工跡があることが判明し、それぞれに写真撮影後、内部の調査を開始した。

9月中旬以降は各遺構ごとの実測作業を進め、作業が終了した遺構から終了写真を撮影した。

9月28日には調査器材を搬出や調査事務所を撤去し、滝坂横穴墓群の調査を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

高萩市は茨城県の北東部に位置し、東は太平洋、西は福島県北部より連なる阿武隈山脈南部の多賀山地を介して久慈郡里美村と接し、南北の台地はそれぞれ北茨城市、多賀郡十王町と接している。市域は西部地域の山地が75%を占め、そこから東に延びる標高40mほどの台地や南北に位置する台地、そして現在の市街地や海岸線からなる沖積低地の三地形区に分類することができる。市域の南北に位置する山地や台地は関根川や花貫川によって開析され、それらの河川は東流して太平洋に流れ込んでいる。また、海岸線には幅の狭い砂丘が形成されている。

山地のほとんどは針葉樹及び落葉樹の山林として利用され、台地上も山林が多く、そのほか畑地として利用されている地域も多い。低地は現在の市街地として利用されている以外は水田が多く、いずれも地域住民の生活と密接に関係している。

滝坂横穴墓群は、高萩市市街地の西部に位置する標高40～45mの高萩市大字高萩152-1の滝神社境内の南傾斜面に構築された横穴墓群で、南南東に舌状に張り出す台地先端部近くの斜面中段（標高20mライン）に構築されている。横穴墓は今回調査されたほかにも隣接して存在し、別支丘の斜面にもその存在が確認されており、全体で横穴墓群が構成され、滝坂横穴墓群はその一支群である。

第2節 歴史的環境

高萩市内には各時代の遺跡が現在65か所ほど周知されているが⁽¹⁾、そのほとんどは山地から張り出す標高40m前後の台地上や海岸線に近い台地上に分布し、さらに砂丘上にも古墳の分布が認められる。また、標高の高い丘陵地区にも数は少ないが分布し、旧石器時代の上君田遺跡はその典型である。

ここで滝坂横穴墓群を中心に高萩市内の各時代の遺跡について概観する。

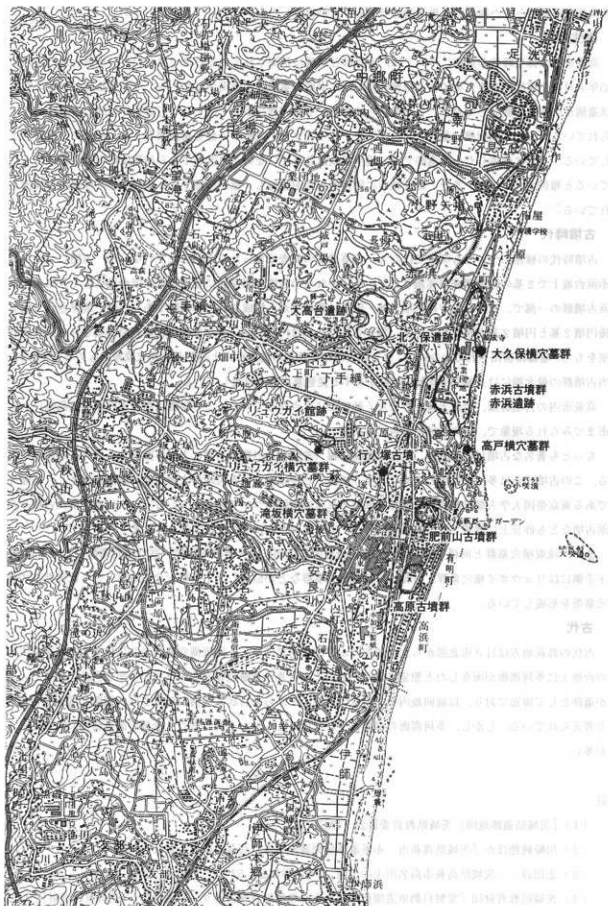
旧石器時代

多賀山地の丘陵には、西洋梨形握斧が出土した上君田遺跡がある。その内容についてはほとんど知られていないが、出土した西洋梨形握斧は現段階で県内最古の文化期に属するものと考えられ、敵打器文化の特色を表している。また、海岸線に発達した赤浜台地上には工業団地造成に伴って昭和45年8月に発掘調査された赤浜遺跡がある。赤浜遺跡の発掘調査は茨城県内初の本格的な旧石器時代の遺跡発掘であり、石刃・ナイフ形石器・搔器などが出土している⁽²⁾。

縄文時代

縄文時代の遺跡も平坦な台地上に分布がみられ、代表的な遺跡として花貫川左岸に位置する島名遺跡や常磐自動車道敷設に伴って昭和59年に発掘調査された小場遺跡などをあげることができる。

島名遺跡は中期から後期にかけての遺跡で、発掘調査は実施されていないが表面採集された土偶はハート形土偶の様式として特徴的であり、茨城県北部の様相を表出している⁽³⁾。また、小場遺跡は中期から後期を主体とした遺跡で、早期や晩期の遺物も出土している。検出された遺物は堅穴住居跡29軒、土坑344基、配石土坑181基などで、土偶など信仰的な遺物が多出しており、それら出土遺物の特徴から東北的な土器様相を有した



第1図 滝坂横穴墓群位置図

丘陵部を後背地とした拠点的な集落遺跡であることが判明した。⁽⁴⁾

弥生時代

高萩市内の弥生時代の遺跡については、それほど明確に把握されているわけではないが、赤浜台地では昭和45年8月の工業団地造成工事に伴う発掘調査の際に中期の集落跡が検出されている。その集落跡は6基の堅穴状遺構が広範囲に散在しており、各遺構からはチャート製の剥片が多く出土して石器製作に関わる遺跡と考えられている⁽⁵⁾。また、滝坂横穴墓群の北西に位置するリュウガイ遺跡の一部も発掘調査され、後期の土器が出土している⁽⁶⁾。さらに前述した小場遺跡では、遺構は検出されていないが包含層中から初期段階の土器片が出土していると報告されている⁽⁷⁾。また、北茨城市に隣接する定田遺跡も一部が発掘され、後期の堅穴住居跡が検出されている⁽⁸⁾。

古墳時代

古墳時代の様相についても明確ではなく、集落遺跡の調査はまったく実施されていないが、古墳については赤浜台地上で2基の古墳調査が実施されている⁽⁹⁾。それらの古墳は海岸線に発達した赤浜台地に広く分布した赤浜古墳群の一部で、以前は前方後円墳3基・円墳10基以上から構成された古墳群^{DB}であったが、削平されて前方後円墳2基と円墳2基が現存している。調査された2基は円墳で、いずれも凝灰岩切石で構築された横穴式石室をもち、埴輪は検出されていない。これらの古墳は主体部の構造や出土品から後期末段階のものと考えられ、当古墳群の最北端には長軸35mほどで埴輪を有する琵琶墓古墳が位置している。

高萩市内の古墳群は、台地上ばかりでなく砂丘上にも点在している。この特徴は高萩市内から福島県いわき市までみられる現象で、この地域の特色でもある。

もっとも著名な古墳は明治30年、日本鉄道海岸線（常磐線）の敷設工事によって削平された行人塚古墳である。この古墳からは多くの遺物とともに「笑う埴輪」と呼ばれている大耳の人物埴輪の頭部が出土し、寄贈先である東京帝国大学人類学教室の八木辨三郎がそれらの埴輪について紹介している⁽¹⁰⁾。このほか肥前山古墳や高浜古墳なども砂丘上に構築された古墳であるが、宅地化のためほとんどが消滅してしまった。

また、滝坂横穴墓群と同様な横穴墓は、赤浜台地の急崖面に大久保横穴墓群・高戸横穴墓群などが点在し、下手側にはリュウガイ横穴墓群、石滝には石滝横穴墓群などが位置し、十王町や北茨城市とともに県北部の横穴墓帯を形成している。

古代

古代の高萩地方は日立市北部から北茨城市にかけて多珂郡に属し、滝坂横穴墓群の北に位置する高萩市大高の台地上に多珂郡衙が所在したと想定されている。この大高台遺跡は標高45mほどの平坦な台地上のほとんどが遺跡として周知しており、以前同地内の上宿尻の耕作土下から数石状の遺構が発見され、郡衙に関連する遺構と考えられている。しかし、多珂郡衙の様相についてはほとんどが不明であり、今後の調査研究に待つところが多い。

註

- (1) 『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 1987・3
- (2) 川崎純徳ほか『茨城県高萩市 赤浜遺跡発掘調査報告』高萩市教育委員会 1972・3
- (3) 志田諱一『茨城県高萩市島名出土の土偶』『考古学雑誌』52-1 日本考古学会 1966・7
- (4) 茨城県教育財団「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書9 小場遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第35集1986・3

(5) 前掲載 (2)

(6) 志田諱一ほか『リュウガイ遺跡』高萩市教育委員会 1976・3

(7) 前掲載 (4)

(8) 川崎純徳「定田遺跡」『日本考古学年報』26 日本考古学会 1975・6

(9) 諸星政得ほか『茨城県高萩市 赤浜古墳群 (発掘調査の概要)』高萩市教育委員会 1972・3

(10) 滑川広之「常陸高萩付近の古墳分布と其発見遺物とに就て」『考古学雑誌』5-1 日本考古学会
1914・9

(11) 八木井三部「常陸多賀郡松原町発見ノ埴輪土偶」『東京人類学会雑誌』138 東京人類学会 1897・9

参考文献

志田諱一ほか『高萩市史 上』高萩市 1969・11

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

滝坂横穴墓群は高萩市市街地の西部に位置し、標高40~45mの東に舌状に張り出す台地先端部近くの急崖面に構築された横穴墓群であり、周辺部の崖面に分布する横穴墓群とともに滝坂横穴墓群を形成している。

現況は宅地裏の山林で、災害関連緊急急傾斜地崩壊対策工事に伴って周知の遺跡であることが確認され、発掘調査が実施された。

今回の調査は滝坂横穴墓群の一支群の調査であったが、古墳時代終末期の横穴墓3基のほか小横穴2基、近代の加工と思われる加工跡18か所が確認された。この支群は舌状の台地先端部までも横穴墓の存在が想定でき、横穴墓の基数は増えるものと考えられる。

調査区の中央に位置する1・2号横穴墓は、数十年前に内部がきれいに掻き出されて物置として利用されたため内部の二次加工が多く、その際に直刀片が出土したという。しかし、いずれの横穴墓から出土したかは不明であり、出土した直刀も腐蝕していたために捨てられて現存していない。

今回の発掘調査において前述した横穴墓をはじめとする各遺構が確認されたが、いずれからも遺物の出土はみられなかった。

第2節 遺 構

(1) 横穴墓

1号横穴墓

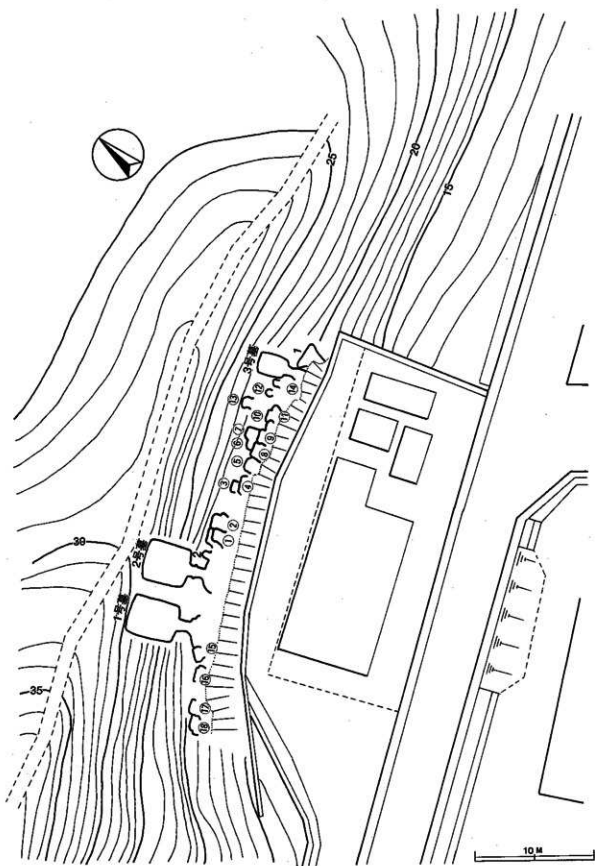
位 置 本横穴墓は調査区の中央西寄りに位置し、今回調査された中で最大規模の横穴墓である。奥壁部床面は標高21.9mラインに位置し、東に第2号横穴墓が隣接している。調査開始時はすでに開口し、玄室天井部や左前壁の天井部、さらに玄門部は現代と思われる後世の加工痕が認められ、造営時の形状を一部喪失している。玄室内は開口時すでに外に掻き出されたものと考えられ、土砂などの堆積はほとんどない。奥壁床面と玄門部床面との比高は約35cmで、玄門部は前庭部と段差があって階段状の施設がみられるが、後世の加工である。

本横穴墓の全長は5.56m、玄室長3.85m、奥壁幅3.0m、高さ1.75~1.9mで、主軸方向はN-28°-Wである。

開口後、本横穴墓は一時倉庫的なものとして使用されたという。

玄室部 平面形状は長方形で、両袖をもつ形態を呈している。床面奥壁部はやや弧状を呈し、右側壁が後世の掘削のため部分的に歪んでいる。立面形態は家形でドーム形を呈し、天井部には主軸に沿って棟が表現され、床面から1.0~1.1mの奥壁および両側壁には軒先を表現した段差が削り出されている。

床面中央には玄門部まで延びる幅10cm内外で深さ7~10cmの排水溝がみられ、奥壁下及び両側壁下にも掘られている。中央部の排水溝は玄門寄りが後世に「囲伊裏」として掘り込められたため一部破壊されている。また、左側壁の排水溝は側壁中央部で途切れ、中央排水溝へ合流する排水溝が認められる。左右の奥壁コーナ部には深さ10~20cmで方形の貯水槽が掘られ、そこから中央部の排水溝へ合流する排水溝もみられる。また、左側壁部の排水溝からも中央排水溝へ延びる排水溝があり、さらに右側壁部からは貯水槽から延びる排水溝に



第2图 滝坂横穴墓群全体图

合流する排水溝もみられ、本横穴墓造営当時に周りから浸み出す水の量が多かったものと推定できる。

床面上には前述した「囲炉裏」が 0.8×1.0 mの長方形に掘られ、左前壁寄りの床面も後世の加工痕が認められる。また、右前壁コーナー部や玄門部寄りには $20 \sim 30$ cmの円形状のピットも掘られ、これらは天井部に掘られたピットと対応しているため、後世に扉状の施設を作った時の柱穴と考えられる。

中央部分も天井部から右側壁部分にかけて後世の掘削痕が認められ、造営時の状態は失われている。

奥壁部には「大正」・「謹賀新年」などの落書きが彫られ、この横穴墓の開口時期は大正時代かも知れない。また、側壁部には玄門寄りの軒先状の段差部分から奥壁側の床に向かって2条の溝が斜めにみられ、床面の排水溝と同様の用途が想定される。さらに、軒先部には奥壁同様竈を立てるための三角状の掘り込みが数か所みられる。

玄室内の加工痕については後世の掘削や敷・苔などのため不明な点が多いが、奥壁寄りの左側壁の一部に加工痕が認められる。その加工痕から最終的な整形に使用された工具は幅9cmほどの直刃の工具と推定でき、上から下へ直線的に加工を施している。

奥壁及び両側壁部の軒先を表現した段差の部分には三角形の掘り込みが数か所みられるが、いずれも後世のもので照明用の竈橋立てとして掘られたものである。また、側壁部や天井部には鉄釘が多く打たれているが、いずれも後世のものである。

玄門部 玄門部は幅 $0.7 \sim 0.8$ mで長さ1mほどあり、本来アーチ状に穿たれたものであるが、後世の掘削によって床と左側壁下部以外は造営時の形状を失っている。中央の排水溝は玄門部分でも確認できるが、玄門部の床中央に後世のピットがみられ、倉庫として利用した際の扉施設の一部と考えられる。

前庭部 玄門部前には狭道部のものではなく前庭部となるが、玄門部から前庭部には後世に作られた階段状の施設があり、造営時の形状については不明である。また、玄門部床面から前庭部床面までの比高は85cmほどであり、前庭部は1.7mほど先で急崖となる。

玄門部から前庭部にかけては凝灰岩の薄片や粒子を多く含む削片状の堆積がみられたが、いずれも開口後に堆積したものである。また、前庭部に点在している凝灰岩塊はいずれも閉塞石ではなく、前庭左側壁から剥がれた凝灰岩塊である。

玄門部に入る階段部の下は 0.35×1.15 mほどの長方形で深さ5cmほど掘り込まれている。また、前庭部右側にも直径43cm、深さ5cmほどの円形の掘り込みがあり、後世に加工されたものである。

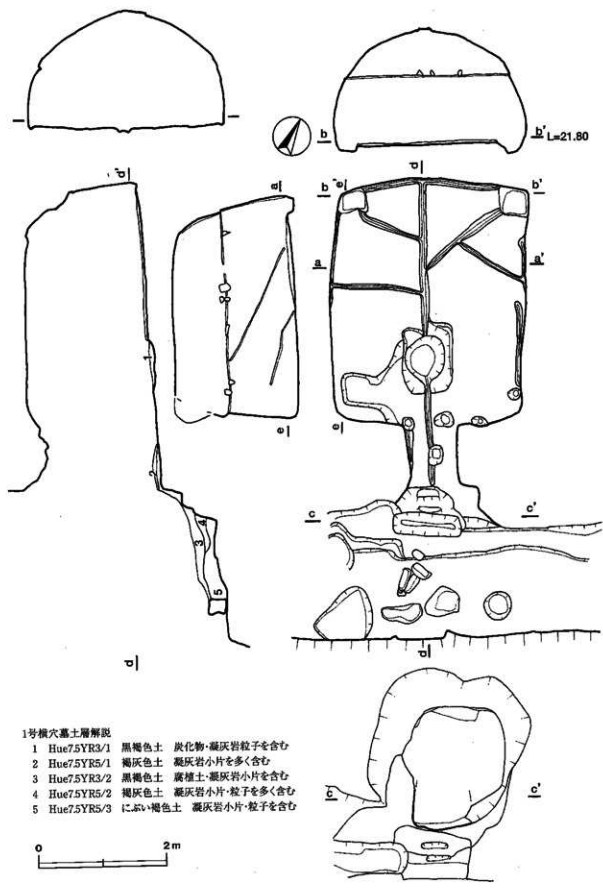
遺物 調査時に遺物の出土はみられないが、昭和37年の市内遺跡分布調査の際には直刀が出土したことが伝えられている。しかし、それらは腐蝕が激しいため投棄されたという。

2号横穴墓

位置 本横穴墓は調査区中央西寄りの1号横穴墓の東に接し、東には2号小横穴が位置している。奥壁部床面は標高21.4mラインにあたり、調査開始時は1号横穴墓同様すでに開口して玄室内もすでに掻き出された状態を呈していた。玄室内部の壁などにも後世の加工痕が部分的にみられ、玄門天井部も加工されて造営当時の形状は一部が残るだけである。

本横穴墓は全長5.50m、玄室長3.50m、奥壁幅3.15m、高さ約2mで、主軸方向は $N-28^{\circ}-W$ である。

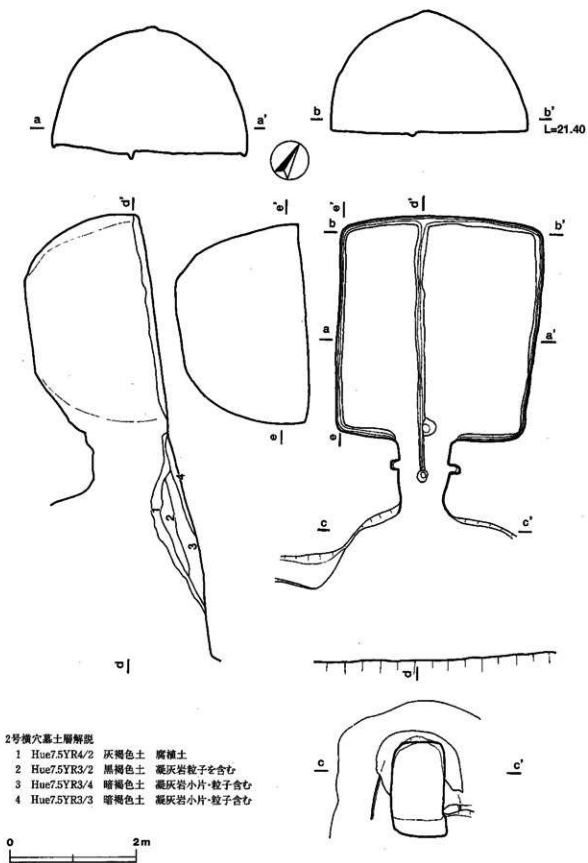
玄室部 平面形状は長方形で両袖をもつ形態を示しているが、前壁部幅が約2.9mとやや狭くなる。床面奥壁部はやや弧状を呈し、各コーナー部も隅丸状を呈している。立面形は長軸方向に棟をもつ家形を呈し、天井部には各コーナー部から棟に向かう稜線が認められる。



- 1号横穴墓土層解説
- 1 Hue7.5YR3/1 黒褐色土 炭化物・凝灰岩粒子を含む
 - 2 Hue7.5YR5/1 褐灰色土 凝灰岩小片を多く含む
 - 3 Hue7.5YR3/2 黒褐色土 腐植土・凝灰岩小片を含む
 - 4 Hue7.5YR5/2 褐灰色土 凝灰岩小片・粒子を多く含む
 - 5 Hue7.5YR5/3 にぶい褐色土 凝灰岩小片・粒子を含む



第3図 1号横穴墓実測図



第4图 2号横穴墓实测图

主軸方向の床面には幅10～15cm、深さ10cmほどの断面形がV字状を呈する排水溝が玄門部まで掘られ、さらに奥壁、両側壁下にも周回し、玄門部で立ち上がっている。床面は玄門部に向かってかなりの傾斜を示し、奥壁部と玄門部での比高は55cmほどである。また、左側壁寄りの床面は板状に剥落して旧状を保っていない。

玄室内の壁面の整形痕については不鮮明であるが、奥壁の一部に1号横穴墓と同様の工具痕が認められ、そのほかは確認できない。

玄門部 玄門部は幅65～90cm、長さ1.1m、高さ約1.3mで入口部の幅が狭く、後世の二次加工がなされている。玄門中央の両側壁には、天井部まで15cmほどの方形に掘り込みがみられ、腐蝕した角材が装着されていた。また、床中央部には径20cmほどの円形のピットがみられ、1号横穴墓と同じように倉庫として利用された際の扉の支柱と考えられる。

玄門部前面には閉塞石を設置するための加工痕が一部にみられ、床部の幅は約1.4mほどであるが、後世の二次加工のために造営当時の形状をほとんど残していない。

前庭部 玄門部前は前庭部となり、左右に大きく開いている。本横穴墓においても前庭部にだけ土砂の堆積がみられたが、いずれも腐葉土的なものと凝灰岩の小ブロックや削滓を多く含む層であり、開口後に堆積したものである。

前庭部は約2mほどがやや平坦でその先は急崖となり、前庭部右には2号小横穴が位置している。

遺物 本横穴墓からの遺物の出土はない。

3号横穴墓

位置 本横穴墓は調査区東端部近くに位置し、東側下には1号小横穴、西側には14号加工跡が隣接している。奥壁部床面は標高19.8mラインで、調査開始時すでに開口しており、天井部は奥壁から約2mまで現存するものの、両側壁の上部は1mほどから先がすべて掘削されている。

玄室内の各壁面や床面は二次的加工痕が多く、旧状を保っている部分は少ない。また、玄室内の堆積土は凝灰岩削滓のブロックが多く、内部はすでに開口時に外へ掻き出されてしまったものと考えられる。

本横穴墓は全長約3.6m、玄室長2.0～2.25m、奥壁幅1.65m、高さ1.35mで、主軸方向はN-37°-Wと前述した1・2号横穴墓より主軸はやや西に偏している。

玄室部 平面形は長方形で両袖をもつ形態であるが、左右の前壁部までの奥壁からの距離には25cmほどの差が認められる。玄室天井部はすでに玄門部寄りが破壊されているものの、立面形はドーム状を呈し、奥壁床面と玄門部床面の比高は30cmほどであるが、玄室内の前半分ほどの床面が二次加工のため掘削され、造営当時の床はほとんど残っていない。

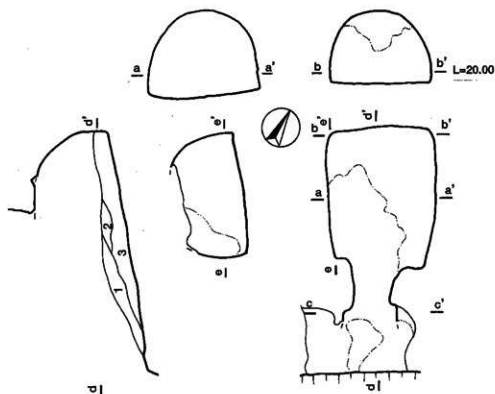
玄室内の堆積土層は30cm前後と厚く、前庭部の最上部層は腐葉土状で、そのほかは凝灰岩の削滓が多く含まれた層であり、二次的に堆積した層である。

玄門部 玄門部は幅50～70cmで右前壁コーナー部分が一部削り取られ、長さは70～80cmである。すでに玄門の天井部は破壊されてその形状はほとんど残っていない。

玄門部表面にはわずかに閉塞石を設置するための加工痕が残るが、その部分は床面で幅85cmほどである。

前庭部 前庭部は玄門部から若干開き、二次的な加工が認められて造営時の形状はほとんど残されず、約1mほどで急崖となる。

遺物 本横穴墓からの遺物の出土はない。



3号横穴墓土層解説

- 1 Hue7.5YR3/1 黒褐色土 高植土
- 2 Hue7.5YR4/1 褐灰色土 凝灰岩粒子を含む
- 3 Hue7.5YR4/2 灰褐色土 凝灰岩小片・粒子含む



第5図 3号横穴墓実測図

(2) 小横穴

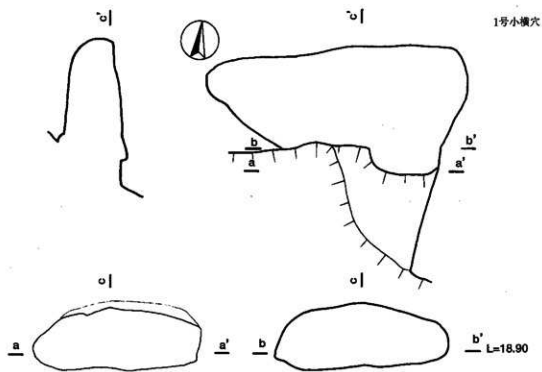
1号小横穴

位置 本小横穴は調査区の東端に位置し、3号横穴墓が西に接している。前面部は急崖の崩落などによって失われ、全体的な形状は不明である。全長約1.0m、奥壁幅2.06m、高さ30~45cmで、主軸方向はN-6°-Wである。開口部床面は標高18.8mラインに位置し、今回調査された中でもっとも下位に位置している。

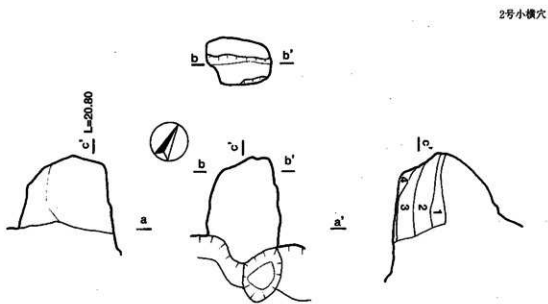
玄室部 本小横穴の平面形は袋状を呈し、左側壁部は前面部が確認されていないがより内部に入り込んでいる。縦断面形は筒状で、横断面形は長楕円形を呈している。掘削はそれほど丁寧なものではなく床面に凹凸がみられ、各壁面には先端の細い工具痕が残り、仕上りの整形はなされていない。その掘削痕からみると、横穴墓群内の小横穴ではなく、後世の掘削とも考えられる。

玄室内にはほぼ全体的に凝灰岩の削片が充満していたが、層位的な違いはみられない。また、崖面崩壊防止工事などのため開口部は破壊されており、開口部は急崖となる。

遺物 本小横穴からの遺物の出土はない。



1号小横穴



2号小横穴



第6图 1・2号小横穴実測図

2号小横穴

位置 本小横穴は調査区の中央西寄りに位置し、2号横穴墓の東に隣接している。2号横穴墓の右前庭部調査の掘土作業中に発見された。全長約1m、最大幅0.56m、高さ0.73mほどで、主軸方向はN-29°-Wであり、開口部の床面は標高20.6mラインにある。

玄室部 2号横穴墓の前庭部右側に構築されているため本来の形状を残していると考えられるが、平面形は舌状を呈して玄門などの施設はなく、立面形はアーチ状である。

玄室内には凝灰岩の削片を多く含む層の堆積がみられたが、造営当時の堆積層ではない。各壁面にはそれほど丁寧な整形痕はみられず、粗雑な掘削痕が残っている。床面も凹凸が激しく、奥壁床面と開口部床面との比高差は5cmほどである。奥壁幅は約40cmほどで、天井部に向かって緩やかに立ち上がり、中位に段を有している。

前庭部 2号横穴墓の右前庭部に構築されているが、玄室床と前庭床とは15cm前後の段差がある。

遺物 本小横穴からの遺物の出土はない。

(3) 加工跡

1号加工跡

位置 本加工跡は調査区中央、2号小横穴の東に位置し、さらに東には2号加工跡が接している。全長は約1.8m、最大幅約1.1m、加工痕の認められる部分の高さは約1mであり、主軸方向はN-28°-Wである。

形状 平面形は方形状を呈しているが、奥壁部から床面には2か所の段差があり、南部分は深い掘り込みを有している。奥壁にも段がみられるが1mほど内傾して立ち上がり、定形的な形状は示していない。また側壁部は直立気味に立ち上がっている。

各壁面には幅10cmほどで直刃の工具痕跡が認められるが、粗雑な加工である。

遺物 本加工跡からの遺物の出土はない。

2号加工跡

位置 本加工跡は調査区の中央に位置し、前述した1号加工跡の東に接している。全長約1.3m、最大幅約1.2m、主軸方向はN-28°-Wで、奥壁床面の標高は20.5mラインにある。

形状 平面形は方形状を呈しているが、奥壁部には段がみられ、床面はやや凹凸があるものの南に傾斜を示し、比高は10cmほどである。前庭部のテラスとは20cmほどの段差があり、1.2mほどで急壁となる。

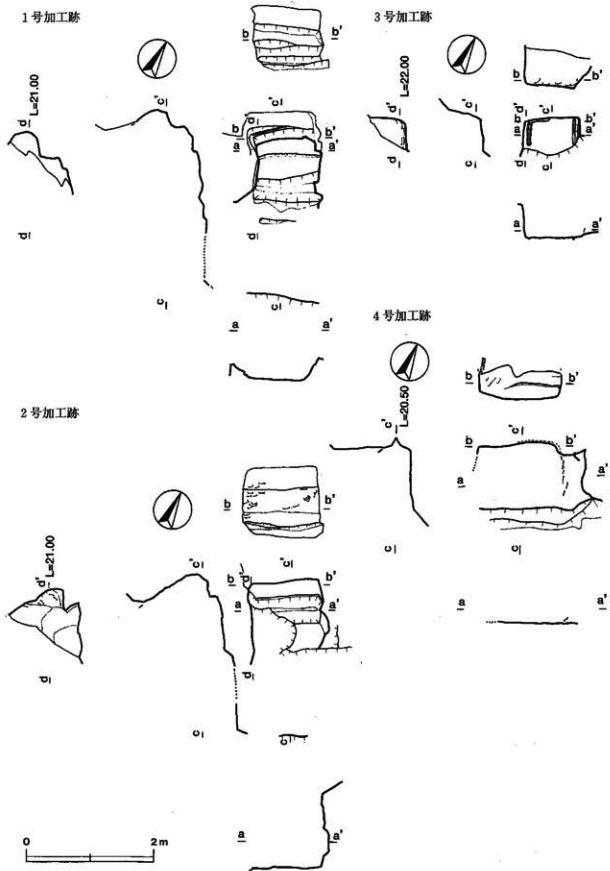
奥壁は内傾して1.1mほど立ち上がり、段の上部には稜がみられる。また、各壁面には幅10cmほどの直刃の工具痕が部分的に残されているが、粗雑な加工である。

遺物 本加工跡からの遺物の出土はない。

3号加工跡

位置 本加工跡は調査区の東に位置し、南に4号加工跡が接している。全長0.6m、最大幅0.98m、主軸方向はN-29°-Wであり、奥壁床面の標高は21.5mラインにある。

形状 平面形は前方部を欠いているが方形状を呈し、左右側壁下には幅約3cm、深さ約2cmで断面形V字状の溝が掘削され、左側壁部の溝は奥壁中央まで達している。床面はやや凹凸があるものの南に緩やかな傾斜を



第7图 1~4号加工跡实测图

示している。また奥壁はやや外傾して50cmほど立ち上がり、側壁は直立気味に立ち上がる。

各壁面には幅10cmほどで角の丸い工具痕が部分的に認められるが、加工は粗雑である。

遺物 本加工跡からの遺物の出土はない。

4号加工跡

位置 本加工跡は調査区の東部に位置し、上部に3号加工跡が接している。全長約1.1m、最大幅約1.3m、主軸方向はN-25°-Wで、奥壁床面は標高20.3mラインにある。

形状 平面形は方形状を呈し、床面はほぼ平坦で前方部はすぐ急崖になる。奥壁床面は緩やかな弧状を呈し、垂直に50cmほど立ち上がるが、上部は崩落している。また中段は幅5~10cmの溝状に掘り込まれている。左側壁は本株のため立ち上がりは明確でなく、右側壁は奥壁寄りの一部が残る。各壁面には幅10cmほどの直刃の工具痕が認められるが、その加工は粗雑である。

遺物 本加工跡からの遺物の出土はない。

5号加工跡

位置 本加工跡は調査区中央の東に位置し、4号加工跡と8号加工跡に接している。全長約1.2m、最大幅約1.1mで、東は8号加工跡によって一部掘削されている。主軸方向はN-8°-Wで、奥壁床面は標高20.0mラインにある。

形状 平面形は方形状を呈し、奥壁下に幅40cm、深さ25cmほどの方形状の掘り込みがある。床面はほぼ平坦であるがやや東に傾斜を示している。奥壁は上部が崩落しているものの60cmほど直立し、左側壁は一部の壁が残る。また右側壁部は8号加工跡によって切り込まれて現存しない。

奥壁部の一部には幅5cmで直刃の工具痕と幅10cmで直刃の工具痕の二種が認められるが、その加工は粗雑である。

遺物 本加工跡からの遺物の出土はない。

6号加工跡

位置 本加工跡は調査区の東部に位置し、東に7号加工跡が複合しているが、複合部分に本株があつて一部不明な部分もある。全長約56cm、最大幅約75cm、主軸方向はN-13°-Wであり、奥壁床面の標高は21.3mラインにある。

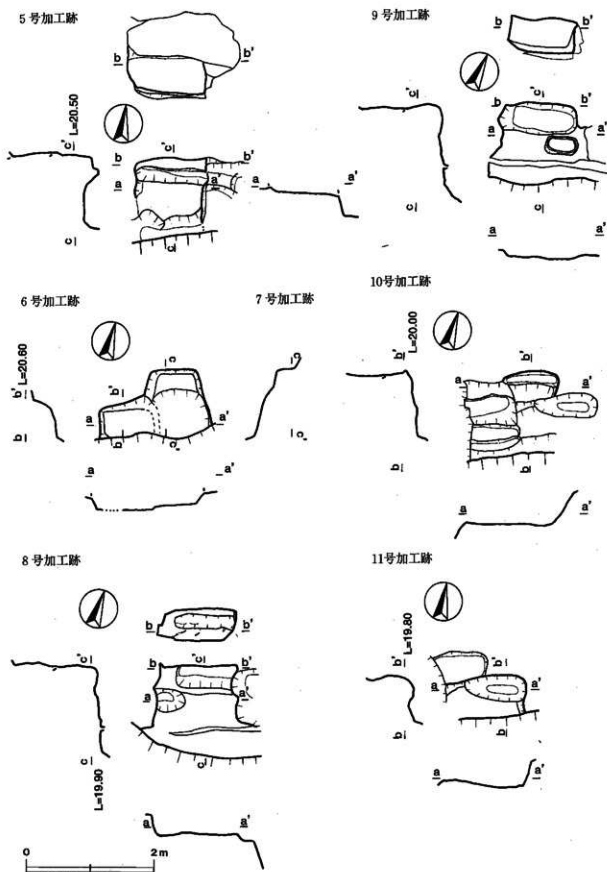
形状 平面形は方形状を呈し、床面は南に傾斜を示している。奥壁は外傾して30cmほど立ち上がり、左側壁は同様な立ち上がりを示している。加工痕については壁面の剥落が激しく不明である。

遺物 本加工跡からの遺物の出土はない。

7号加工跡

位置 本加工跡は調査区の東部に位置し、6号加工跡と複合している。全長約1.1m、最大幅約1.0m、主軸方向はN-15°-Wであり、奥壁床面は標高21.4mラインにある。

形状 平面形状は長方形状を呈し、内部に凝灰岩削津の堆積がみられた。床面は南に傾斜を示し、奥壁より20cmほどから急傾斜となり、約1mで急崖となる。奥壁は直立気味に25cmほど立ち上がり、右側壁は外傾して10cmほど立ち上がっている。加工痕については壁面の剥落が激しいため不明である。



第8图 5~11号加工跡実測图

遺物 本加工跡からの遺物の出土はない。

8号加工跡

位置 本加工跡は調査区の東部の6号加工跡の下部に位置し、5号加工跡が西に接している。全長約1.3m、最大幅約1.2m、主軸方向はN-19°-Wで、奥壁床面は19.8mラインにある。

形状 平面形は方形状を呈しているが、東に接する9号加工跡や西に接する6号加工跡のため定形化したものではない。奥壁下には長さ35cm、幅80cm、深さ5cmほどの掘り込みがあり、床面は南に傾斜を示している。また、左側壁下にも35×45cm、深さ5cmほどの楕円形の掘り込みがある。

奥壁はほぼ直立気味50cmほど立ち上がり、中央部に幅10~20cmの粗雑な加工痕が部分的に認められる。左側壁部はやや外傾して39cmほど立ち上がり、右側は東に接する9号加工跡へと続いている。また、本加工跡のテラス部分には東西方向の大きな亀裂がみられる。

遺物 本加工跡からの遺物の出土はない。

9号加工跡

位置 本加工跡は調査区の東部に位置し、8号加工跡が西に接している。全長約1.3m、最大幅約1.2m、主軸方向はN-25°-Wで、奥壁床面は標高19.6mラインにある。

形状 平面形は方形状を呈しているが、右側壁部はほとんどみられない。奥壁下には長さ50cm、深さ5cmほどの掘り込みがみられ、中央右側にも30×70cm、深さ5cmほどの楕円形の掘り込みがある。床面には凹凸がみられるが南に傾斜を示し、奥壁から1.3mほどで急崖となる。また、テラス部分には東西方向の大きな亀裂がみられる。

奥壁は59cmほどは垂直に立ち上がり、丁寧な加工痕を残している。左側壁は外へ開いて10cmほど立ち上がり、右部に側壁はみられない。また、各壁面には粗雑な加工痕が認められる。

遺物 本加工跡からの遺物の出土はない。

10号加工跡

位置 本加工跡は調査区の東部に位置し、11号加工跡が南東に接している。全長約1.1m、最大幅約1.4m、主軸方向はN-17°-Eで、奥壁床面は標高19.8mラインにある。

形状 平面形状は楕円形状の掘り込みが重なって不定形を呈し、奥壁下に長さ25cm、幅90cm、深さ5cmほどの楕円形の掘り込みがみられる。奥壁は50cmほどに加工痕がみられ、下部が5cmほど掘り込まれている。床面には凹凸があって南に傾斜を示し、奥壁から約1.1mほどで急崖となる。

遺物 本加工跡からの遺物の出土はない。

11号加工跡

位置 本加工跡は調査区の東部に位置し、10号加工跡の南東に接している。全長約0.7m、最大幅約1.2m、主軸方向はN-13°-Wで、奥壁床面は標高19.6mラインにある。

形状 平面形は方形状と想定され、奥壁下に長さ40cm、幅95cm、深さ10cmほどの楕円形状の掘り込みがみられる。奥壁は直立気味に60cmほど立ち上がり、右側壁は同様に40cmほど立ち上がっている。床面は南に傾斜を示し、奥壁より80cmほどで急崖となる。また、各壁面には粗雑な工具痕が認められる。

遺物 本加工跡からの遺物の出土はない。

12号加工跡

位置 本加工跡は調査区の東部に位置し、14号加工跡の西に接している。全長約60cm、最大幅約60cm、主軸方向はN-34°-Wで、奥壁床面は標高20.3mラインにある。

形状 平面形は楕円形状を呈し、床面は南に傾斜を示している。奥壁は曲線的に60cmほど立ち上がり、両側壁部は二次的な掘削のためそれほど明確ではない。また、各壁面は剥落が激しく、加工痕は不鮮明である。

遺物 本加工跡からの遺物の出土はない。

13号加工跡

位置 本加工跡は調査区の東部に位置し、奥壁床面は標高22.4mラインにあって今回調査した遺構の中で最も高い位置にあたり、全長約0.7m、最大幅約1.0m、主軸方向はN-21°-Wである。

形状 平面形は左側が崩落しているが方形形状を呈し、奥壁下は深さ20cmほど掘り込まれている。奥壁は段を有しながら70cmほど立ち上がり、右側壁はほぼ垂直に50cmほど立ち上がっている。また、各壁面には粗雑な加工痕が認められる。

遺物 本加工跡からの遺物の出土はない。

14号加工跡

位置 本加工跡は調査区の東部に位置し、3号横穴墓に東壁が接している。全長約90cm、最大幅約70cm、主軸方向はN-20°-Wで、奥壁床面は標高20.6mラインにある。

形状 平面形は東部が3号横穴墓に接しているが楕円形状を呈し、奥壁下は5cmほど楕円形状に掘り込まれている。奥壁部は直立気味に50cmほど立ち上がり、左側壁部は外傾して20cmほど立ち上がっている。各壁面には粗雑な加工痕がみられ、奥壁下には東西方向の亀裂がある。

遺物 本加工跡からの遺物の出土はない。

15号加工跡

位置 本加工跡は調査区の西部に位置し、東に1号横穴墓、西に16号加工跡が接している。全長約1.1m、最大幅約1.2m、主軸方向はN-60°-Wで、奥壁床面は標高20.2mラインにある。

形状 平面形は方形形状を呈し、奥壁下には長さ約0.6m、幅約1.2m、深さ10cmほどの方形形状の掘り込みがある。奥壁部には段を有し、中段部が40cmほど掘り込まれ、両側壁は方形の掘り込みから直立気味に10cmほど立ち上がる。また、本加工跡の前面部床は南に緩やかに傾斜し、1号横穴墓の左前底部から崩落した大きな凝灰岩がみられる。

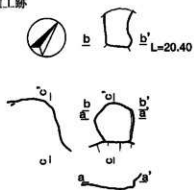
遺物 本加工跡からの遺物の出土はない。

16号加工跡

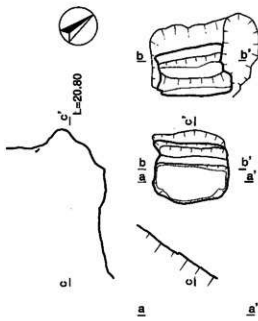
位置 本加工跡は調査区の西部に位置し、東に15号加工跡、西に17号加工跡が接している。全長約1.3m、最大幅約1.3m、主軸方向はN-31°-Wで、奥壁床面は標高20.3mラインにある。

形状 平面形は数回掘削されているものの本来方形形状を呈したものと考えられる。奥壁は複雑に掘削されて

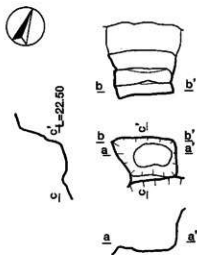
12号加工跡



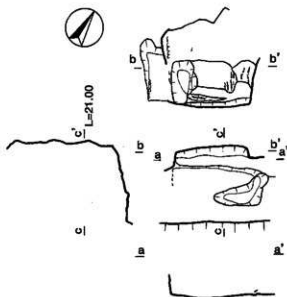
15号加工跡



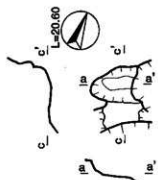
13号加工跡



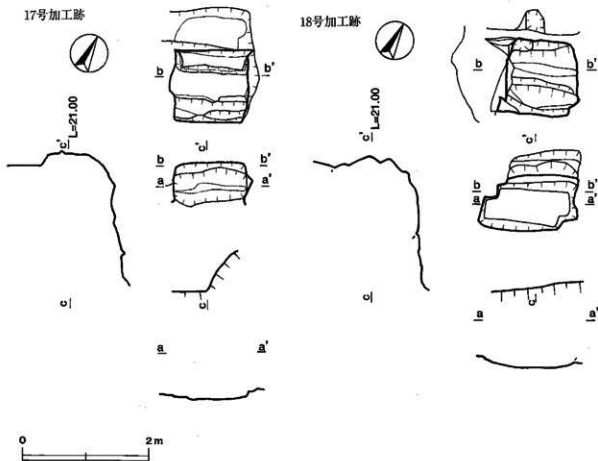
16号加工跡



14号加工跡



第9图 12~16号加工跡实測图



第10図 17・18号加工跡実測図

いるが1.5mほど直立気味に立ち上がり、両側には工具を直角に当てて角部を構築した加工痕が部分的に残っている。左側から下段部にはL字状に浅い掘り込みがみられる。床面は南に傾斜を示し、2か所に東西方向の亀裂がある。また、奥壁より1.3mほどで急崖となる。

左側壁部は奥壁寄り的一部分が残って直立気味に30cmほど立ち上がり、右側壁部も同様である。また、右側壁部寄りには不定形で粗雑な浅い掘り込みがみられるが、奥壁中央の整形は丁寧である。

遺物 本加工跡からの遺物の出土はない。

17号加工跡

位置 本加工跡は調査区の西部に位置し、東に16号加工跡、西に18号加工跡が接している。全長約0.65m、最大幅約1.3m。主軸方向はN-27°-Wで、奥壁床面は標高20.2mラインにある。

形状 平面形は方形を呈し、奥壁下は深さ10cmほど掘り込まれている。掘り込みの南は傾斜を示し、奥壁より2mほどで急崖となり、途中に東西方向の2か所の亀裂がある。

奥壁は段を有しながら下部が緩やかに30cmほど立ち上がり、さらにその上部は直立気味に立ち上がって1mほどで天井部となる。上段部には幅10cm内外、深さ10cmほどが溝状の掘り込みが長方形にみられ、断面形は

V字状を呈している。奥壁上段部の加工痕と溝部の加工痕は幅10cmほどの直刃の工具が使用され、下段部には丸刃の加工工具痕が認められる。しかし、いずれも粗雑な加工である。

遺物 本加工跡からは遺物の出土はない。

18号加工跡

位置 本加工跡は調査区のもっとも西に位置し、東に17号加工跡が接している。全長約1.0m、最大幅約1.5m、主軸方向はN-30°-Wで、奥壁床面は標高20.2mラインにある。

形状 平面形は複雑であるが方形状を呈したものと考えられる。奥壁下には深さ10cm内外の方形状の掘り込みがあり、奥壁は1.2mほど立ち上がるが段が数段みられる。前面部の床は剥落が激しく、2か所には東西方向の亀裂がみられ、奥壁から約2mで急崖となる。また、各壁面には粗雑な加工痕がみられるが、加工工具は幅10cmほどの直刃の工具である。

遺物 本加工跡からは遺物の出土はない。

第3節 まとめ

高萩市両坂横穴墓群の発掘調査は、災害関連緊急急傾斜地崩壊対策工事に伴って平成12年9月に実施し、3基の横穴墓、2基の小横穴、18か所の加工跡が検出された。各遺構の内容については前章で記述したとおりで、これらの遺構の中で3基の横穴墓が本来古墳時代終末期に構築された墓であり、墓域として当地区を占地していたものである。このほかにも横穴墓は隣接地域にも広がりを見せ、今回調査された地区の東隣接地域にもテラス状の痕跡が確認されることから、当横穴墓群はさらに東にのびるものと想定される。さらに、北側に位置する別支丘の崖面にも横穴墓の存在が確認でき、全体で横穴墓群を構成しているものと考えられる。この調査区内では小横穴も2基調査されているが、いわゆる横穴墓群に付随するような小横穴かどうかについては即座に判断できず、後世の掘削の可能性が高いと考えられる。さらに、横穴墓群の前庭部の崖面にみられる加工跡については、加工痕やその形状不明の規模などから近代以降につけられたものであると考えられるが、まったくその用途については不明である。

当横穴墓群の今回の調査によって出土した遺物はなく、数十年前に横穴墓から直刀が出土したと伝えられている。しかし、出土した直刀はすでに廃棄され、出土横穴墓やその数量についても特定できず、横穴墓の年代を明確に表出することはできない。

当横穴墓群で併存する1・2号横穴墓は規模的にも形状的にも多くの類似点を有している。いずれも玄室内部の構造は家形を示し、玄室長は1号墓3.85m、2号墓3.50m、奥壁幅は1号墓3.00m、2号墓3.15mとほぼ同規模であり、時期的にもそれほど年代差があるものとは考えにくい。時期判定資料の少ない中での時期決定はきわめて困難ではある。

ここで周辺地域の横穴墓の調査例を概観すると、横穴墓の調査例は県内でもそれほど多くはなく、日立市内では千福寺横穴墓群⁽¹⁾・赤羽根横穴墓群⁽²⁾・坂下横穴墓群⁽³⁾の調査が代表的なものである。また、常陸太田市内にも横穴墓の分布が多く、身籠山横穴墓群⁽⁴⁾・幡山横穴墓群⁽⁵⁾などが発掘調査された代表的なものである。また、北茨城市内でも尾形山横穴墓群の調査が実施され、さらに福島県いわき市内では横穴墓群の調査が多くなされている⁽⁷⁾。とくにいわき市内では装飾横穴である中田横穴墓⁽⁶⁾の調査は著名で副室構造を示す玄室が発見され、銅鏡などが出土している。時期的には6世紀後半と報告され、当地域の初源的な横穴墓と考えられる。

前述した隣接地域の横穴墓との個別的な検討は充分には実施していないが、千福寺横穴墓群32号墓や坂下横穴墓13号墓などのように各横穴墓群の盟主的なその群の中心となる大型の家形横穴墓が1～2基含まれている場合が多く、形状的には滝坂1・2号横穴墓がそれにあたる。それらは規模的にも滝坂横穴墓群中の最大のもので、最古段階に構築されたものと想定することができる。また、その被葬者層は当地域の支配者層の一部と想定することが可能であり、造営時期は7世紀代と考えられる。

今後、地域的な支配者層の解明には県北部地域の各横穴墓群との比較検討や、海岸部の台地に位置した赤浜古墳群などとの比較検討が進められれば、県北部地域の古墳時代から律令期へ移行する時期の支配者層の消長が鮮明なものとなると考えられるが、今後に残された課題も多い。

- (1) 佐藤政則ほか「久慈千福寺下横穴墓群」『日立市文化財調査報告』第14集 日立市教育委員会 1985・3
鈴木裕芳ほか「千福寺下横穴墓群 第2次発掘調査報告」『日立市文化財調査報告』第16集 日立市教育委員会 1986・3
- (2) 佐藤政則ほか「日立市赤羽横穴墓群発掘調査報告書」『日立市文化財調査報告』第2集 日立市教育委員会 1977・10
鈴木裕芳ほか「赤羽横穴墓群 B支丘1号墓の調査」日立市教育委員会 1987・3
- (3) 生田目利「坂下横穴墓群-A支群発掘調査報告書-」『日立市文化財調査報告』第6集 日立市教育委員会 1991・3
- (4) 関根忠邦ほか「身隠山横穴群の研究」常陸太田市教育委員会 1971・3
- (5) 佐藤正好ほか「轡山遺跡発掘調査報告」常陸太田市教育委員会 1977・3
- (6) 市毛美津子ほか「尾形山横穴墓群-D支群調査報告-」『北茨城市文化財調査報告』V 北茨城市教育委員会 1993・3
- (7) 佐藤典邦ほか「下川子田横穴群」『いわき市埋蔵文化財調査報告』66冊 いわき市教育委員会 2000・3など
- (8) 渡辺一雄ほか「いわき市史別巻 中田裝飾横穴」いわき市 1971・3

付篇 茨城県内横穴墓関係文献

- 1 松村肇「常陸国多賀郡大津の横穴」『東京人類学会雑誌』21-237 東京人類学会 1905
- 2 大内義比「常陸那珂郡中野村に於ける横穴」『考古界』6-11 日本考古学会 1908
- 3 小松真一「常陸多賀郡の一横穴」『人類学会雑誌』37-11 人類学会 1922
- 4 埴瑞比古「十五郎穴」『茨城県史蹟名勝天然記念物調査報告』6 茨城県 1940
- 5 石井周作「中根横穴古墳群」『古墳研究』1943
- 6 高根信和「常陸国山吹山の特殊構造を有する横穴について」『若木考古』56 國學院大學若木考古学会 1950
- 7 西野文男「二・三の遺跡についての調査消息」『史窓月報』1951
- 8 山本諒「平磯町に存する土窟について」『史潮』2-1 1952
- 9 大森信英「常陸太田市榎町・榎横穴古墳調査報告」『茨城県常陸太田市文化財調査報告』常陸太田市教育委員会 1954
- 10 常陸一高史学部「日立市相田第一号横穴調査報告」1957
- 11 西宮一男「常陸国の横穴古墳についての試論」『高等教育』11 1964
- 12 齊藤忠「榎の横穴の彫刻」『三彩』176 1964
- 13 榎戸庄衛「常陸太田市にあるバツケ裝飾古墳をみて」『三彩』176 1964
- 14 服部保・川崎純徳「新治郡出島村における横穴墓の新例」『ひたちじ』3 1965
- 15 大森信英「常陸太田市榎町榎横穴古墳調査報告」常陸太田市教育委員会 1966
- 16 大森信英「茨城県水戸市下国井町権現山横穴」『日本考古学年報』14 日本考古学協会 1966
- 17 伊東重敏「横穴墓——一九五一年一月十五郎穴八重崎支群32号横穴墓調査のメモとして」『ひたちじ』5 茨城考古学会 1966
- 18 竹石健二「茨城県新治郡出島村所在崎浜横穴墓群について」『史叢』11 1967
- 19 大森信英・関根忠邦・高根信和「茨城県久慈郡金砂郷村猫淵横穴調査報告」『茨城考古学』1 茨城考古学会 1968
- 20 大森信英・関根忠邦・高根信和「茨城県久慈郡猫淵横穴群」『茨城考古学』2 茨城考古学会 1969
- 21 大森信英・関根忠邦・高根信和「茨城県久慈郡金砂郷村猫淵横穴調査報告」『日本考古学年報』17 日本考古学協会 1969
- 22 関根忠邦ほか「身隠山横穴群調査報告」常陸太田市教育委員会 1971
- 23 関根忠邦ほか「身隠山横穴群の研究」常陸太田市教育委員会 1971
- 24 高根信和・茅根修嗣「常陸太田市天神林町所在横穴調査報告」『茨城考古学』4 茨城考古学会 1971
- 25 瀧田宏・川崎純徳「北茨城市二ツ島横穴の調査」『常総台地』7 常総台地研究会 1976
- 26 佐藤政則ほか「榎山遺跡発掘調査報告」常陸太田市教育委員会 1977
- 27 佐藤政則ほか「日立市赤羽横穴墓群発掘調査報告書」『日立市文化財調査報告』第2集 1977
- 27 関根忠邦「釜田横穴群発掘調査報告」常陸太田市教育委員会 1979
- 29 小林三郎ほか「十五郎穴横穴群発掘調査報告書」勝田市教育委員会 1981
- 30 瓦吹堅「北茨城市内の古墳と横穴」『北茨城史壇』4 北茨城市史壇さん委員会 1984
- 31 佐藤政則ほか「久慈千福寺下横穴墓群」『日立市文化財調査報告』第4集 日立市教育委員会 1985

- 32 鈴木裕芳ほか「千福寺下横穴墓群 第2次発掘調査報告」『日立市文化財調査報告』第16集 1986
- 33 鈴木裕芳ほか「赤羽横穴墓群 B支丘1号墓の調査」日立市教育委員会 1987
- 34 「茨城県考古学協会シンポジウム 関東横穴墓遺跡検討会資料」茨城県考古学協会 1991
- 35 高根信和「幡山横穴群」『茨城県考古学協会シンポジウム 関東横穴墓遺跡検討会資料』茨城県考古学協会 1991
- 36 鈴木裕芳「日立市域の横穴墓群」『茨城県考古学協会シンポジウム 関東横穴墓遺跡検討会資料』茨城県考古学協会 1991
- 37 生田目利「坂下横穴墓群」『茨城県考古学協会シンポジウム 関東横穴墓遺跡検討会資料』茨城県考古学協会 1991
- 38 片平雅俊「茨城県北部の横穴墓群」『茨城県考古学協会シンポジウム 関東横穴墓遺跡検討会資料』茨城県考古学協会 1991
- 39 小林三郎「勝田市十五郎穴横穴墓群」『茨城県考古学協会シンポジウム 関東横穴墓遺跡検討会資料』茨城県考古学協会 1991
- 40 「鹿島町域の横穴墓群」『茨城県考古学協会シンポジウム 関東横穴墓遺跡検討会資料』茨城県考古学協会 1991
- 41 生田目利「坂下横穴墓群 A支群発掘調査報告書」『日立市文化財調査報告』第6集 日立市教育委員会 1991
- 41 生田目利「十王前（カンブリ穴横穴墓群考）」『博古研究』創刊号 博古研究会 1991
- 42 市毛美津子ほか「尾形山横穴墓群-D支群調査報告-」『北茨城市文化財調査報告』V 北茨城市教育委員会 1993
- 43 市毛美津子「駒木横穴群」『北茨城市文化財調査報告』Ⅷ 北茨城市教育委員会 1996

写 真 图 版

滝坂横穴墓群遠景（南方向から）



滝坂横穴墓群近景



滝坂横穴墓群近景



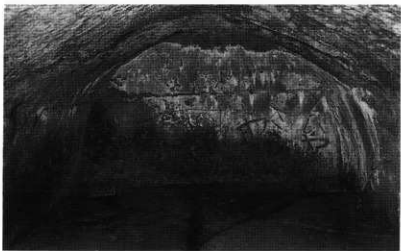
PL 2



1号横穴墓



1号横穴墓階段施設



1号横穴墓奥壁

2号横穴墓・2号小横穴・1号加工跡

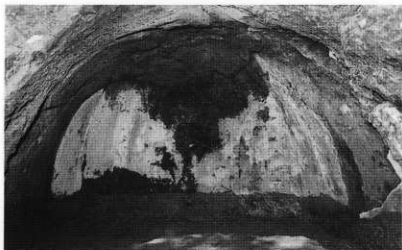


2号横穴墓奥壁



3号横穴墓





3号横穴墓奥壁



1号小横穴



2号小横穴

横穴墓群調査風景（西方向から）



横穴墓群近景（東方向から）



1・2号加工跡



茨城県教育財団文化財調査報告第181集

災害関連緊急傾斜地崩壊対策工事
に伴う埋蔵文化財調査報告書

滝坂横穴墓群

平成13(2001)年3月15日 印刷

平成13(2001)年3月15日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 富士オフセット印刷株式会社